

355  
416



始





特 230  
77



歌  
集  
喜

喜久短歌會第一歌集

福岡縣小倉高等女學校

久





## 序

趣味は人生の欲求である。しかも趣味はおのづからその人の人格を表現する。されば趣味は飽迄も高尚なものでなければならぬ。將來家庭の中心として活動すべき女性は、殊に高尚な趣味の教養を積むことが必要であらう。古來、日本人は、男女の別なく、貴賤を問はず花鳥風月に懷を寄せて樂んだ。これまた趣味の最善なるものゝ一つであらう。さきに、本校職員生徒の有志、短歌會を組織して、課業の餘暇歌道の研鑽に勵まれ、今その努力の結晶たるこの歌集を編



2  
 まれたことは洵に喜ぶべく、時と共に次第に価値と深さを加へて  
 お互の情操生活に必ずよき刺戟と統一とを與へることゝ信ずる。願  
 はくは、よくこれを愛護され、ますます健全な發達を期せられたい。

昭和九年三月八日

糠塚 卯助

目次

序表	紙	糠塚 卯助
短歌 (五十音順)		
白書院	池本三七子	
橙の實	伊藤季夫	
雜草	海老澤信次郎	
日記抄	北澤君江	
たびごころ	徳永定壽	
山と海と	長澤由之	
アカシヤの花	松尾恒次	



安部陸美 (一三)  
 岩谷ハツエ (一五)  
 井上スミ (一七)  
 磯谷チトセ (一九)  
 魚住繁子 (二一)  
 岡崎マサエ (二三)  
 大石静子 (二五)  
 大家トモエ (二七)  
 柏田百子 (二九)  
 勝山キヌ (三一)  
 川口君子 (三三)  
 甲斐花子 (三五)  
 藏内國榮 (三七)  
 酒井ツチエ (三九)

天本キヨ子 (二四)  
 入澤富美枝 (二六)  
 井上文子 (二八)  
 井關美子 (三〇)  
 惠良八重子 (三二)  
 沖原淑子 (三四)  
 大西清子 (三六)  
 岡本歌子 (三八)  
 金野ハルエ (四〇)  
 神谷松枝 (四二)  
 熊野都 (四四)  
 久良知婦紀子 (四六)  
 小林壽子 (四八)  
 佐志八重 (五〇)

篠原ミユキ (四二)  
 下村富美子 (四四)  
 末永ミチ子 (四六)  
 末永江水子 (四七)  
 宗スミ子 (四九)  
 高柳絢子 (五一)  
 田島きよ子 (五三)  
 田中幸江 (五五)  
 寺尾美代子 (五七)  
 中原トキハ (五九)  
 野口かつ子 (六一)  
 畑末子 (六三)  
 半田笑子 (六五)  
 福森三和子 (六七)  
 町田カズエ (六九)

清水スミ子 (四三)  
 菅沼富士乃 (四五)  
 須藤富美 (四七)  
 園田美代 (四九)  
 高山美代子 (五一)  
 竹代秀子 (五三)  
 田中千代 (五五)  
 田原稔子 (五七)  
 徳田良江 (五九)  
 丹生美代子 (六一)  
 長谷部道江 (六三)  
 林千代 (六五)  
 廣野初枝 (六七)  
 松木正子 (六九)  
 松崎直子 (七一)



梔

子集

(二年)

(一三)

岡野 榮美子 (一九)  
 米谷 志奈惠 (二〇)  
 鈴木 薫 (二〇三)  
 津田 ナツ子 (二〇五)  
 長岡 智恵子 (二〇七)  
 持松 信子 (二〇九)  
 山口 博子 (二一一)

河村 砂子 (二〇〇)  
 神山 小枝子 (二〇三)  
 武谷 千歳 (二〇四)  
 中川 よしゑ (二〇六)  
 畑間 イヨ子 (二〇八)  
 守友 伸子 (二一〇)  
 吉田 貞子 (二一一)

赤染 美智子 (二二五)  
 桶川 恵美子 (二二七)  
 北島 昌子 (二二九)  
 木村 照子 (二三二)  
 轟 榮枝 (二三三)  
 内藤 静子 (二三五)

井上 芳子 (二二六)  
 北澤 和代 (二二八)  
 木村 伸子 (二三〇)  
 津田 朗子 (二三三)  
 豊原 みどり (二三四)  
 永見 行恵 (二三六)

寒

椿集

(三年)

(九三)

松尾 政子 (七一)  
 丸尾 マサエ (七三)  
 南里 初代 (七五)  
 南 國子 (七七)  
 村田 静 (七九)  
 名生 晴子 (八一)  
 森井 春子 (八三)  
 山田 澄子 (八五)  
 山本 ヨシ (八七)  
 吉永 敏子 (八九)  
 米田 島子 (九一)

松尾 信子 (七三)  
 道本 ヒサ (七四)  
 水岡 スミエ (七六)  
 村上 和 (七八)  
 村田 五百子 (八〇)  
 毛利 昭子 (八二)  
 山時 富子 (八四)  
 山本 ヨシ (八六)  
 米原 トミ子 (八八)  
 吉本 和子 (九〇)

(研究科)

(研究科)

(研究科)

青木 ツヤ子 (九五)  
 井上 多恵 (九七)

伊藤 津美子 (九六)  
 大我 節子 (九八)



川波 静 (二五)  
 北島 米子 (二五七)  
 志道 淑子 (二五九)  
 角 一惠 (二六一)  
 田仲 芳子 (二六三)  
 高鶴 信子 (二六五)  
 千々和 ミツ子 (二六七)  
 土谷 貞子 (二六九)  
 豊田 和代 (二七一)  
 錦戸 マユミ (二七三)  
 淵上 藤枝 (二七五)  
 藤本 とし (二七七)  
 松本 ユキ子 (二七九)  
 宮崎 ミキ (二八一)  
 村田 榮子 (二八三)

川上 綾子 (二五)  
 島田 アキエ (二五八)  
 潮上 温子 (二六〇)  
 武谷 安代 (二六一)  
 田中美稔子 (二六三)  
 市川美佐子 (二六五)  
 坪井富士惠 (二六七)  
 登本壽々子 (二六九)  
 成田 一子 (二七一)  
 葉山 禎子 (二七三)  
 藤田 澄江 (二七五)  
 藤戸 和子 (二七六)  
 松本 光枝 (二七八)  
 宮崎 桂子 (二八〇)  
 森 敏子 (二八二)

梅

花 集 (一年)

(一四)

(一四)

中島 和歌子 (二七)  
 奈須 ヨシエ (二九)  
 長谷川 貞子 (三一)  
 日野 百合枝 (三三)  
 古田 久代 (三五)  
 水之江 マスエ (三七)  
 村上 ツギ子 (三九)  
 吉元 マサイ (四一)

中村 智子 (二八)  
 野堀 鈴子 (三〇)  
 東 百合子 (三二)  
 深澤 光子 (三四)  
 牧村 秀子 (三六)  
 三原 温子 (三八)  
 藪内 静子 (四〇)

青木 愛子 (二四)  
 岩崎 博子 (二四七)  
 白木 淑子 (二四九)  
 奥 久子 (二五一)  
 太田 政子 (二五三)

伊木 和子 (二四)  
 浦上 とき子 (二四八)  
 大宮 道代 (二五〇)  
 小川 澄子 (二五二)  
 川野 久枝 (二五四)



短

歌

歌集刊行にあたって

和	吉	山	八
田	田	崎	木
佳	静	房	延
枝	子	保	延
			(二八五)
			(二八七)
			(二八九)
			(二九二)

井	吉	山	八
上	田	口	下
慶	稔	豊	田
子	枝	子	徳
			子
			(二八六)
			(二八八)
			(二九〇)
			(二九三)

北	德	海	松	長
澤	永	老	尾	澤
		澤	恒	由
君	定	信	次	之
		次	郎	
江	壽	郎		



## 白書院

池本三七子

三月十五日京都二條離宮を拜観す。  
 白書院の庭に櫻樹一株、年経り枝垂  
 れてまこまにめでたし。

白書院のふるき櫻はしだれつゝしだれてまさに白砂を衝つ

白砂をうたんと落つるそのかたち櫻がもてるいきほひを見つ

御庭は小堀遠州の作。清らなり。

しづけさよ廣らの庭にうごくもの鶉が二ひきあそびてぞをる

しづけさよ廣らの庭に動くもの鶉がをりていよゝしづけき



橙の實

伊藤季夫

庭ぐまの橙の新芽萌え立ちて黄ばめる實見ゆ茂みの中に  
氣遣ひて植ゑかへたりし古梅は春待ち設けて花咲きにけり  
池の面に鯉は音して跳ねて居り見て居るうちに驟雨おそひ來  
雨もよひの足立山並見上げつゝ傘持ち行けど祖母のすゝむる  
聞きなれし裏の小山の水音のいつとはなしに温みて聞ゆ

雑草

海老澤信次郎

放課時を机によりて黙し居れば同僚トモら聲高に倫理觀語る  
妙見の神苑に立ちて見はるかす小倉街なみ雪に埋もる  
福智なるこゝの檜原を降りつゝ谷川の音のかそけきを聞く  
春づきし此の朝空にガラを焼く煙黒々とひろがり昇る  
子等を集め紙芝居見せて飽ひさぐ若き男は今日も來れり



さはやかにもの言ふ女ら乗りて來つ眼をとちてむかひるにけり

眼ひらけば女坐れり朝げはひとゝのふ顔にむかふそもしさ

忙しく乗り來し人の言ひ交はす言葉にすでに東京を感ず

歩廊の鏡に向へば肩をこして列車の窓はつらなりうつれり

來まさぬをすでに知りつゝ窓あけて歩廊に群るゝ人を見てをり

眞日のもとテントを背負ひてゆきゆけば木影なき道はおのづから  
峠なり

目のかぎり峠の道は日のさかり木影も見えず岩に息づく

孟宗の葉すれの音のさら／＼に身にしむ秋の朝となりけり

秋の空清く澄みけりつく／＼とむなとに深く我を見るかな

ひねもすをたまさかに獨りこもりけりふすまもる風の今日は身に  
しむ



## 山と海と

長澤由之

紺青の福智山なみよきほどに雪積り居り陽出でてしばし

海峡の秋も逝く日にイギリスの船等見つゝ子らと晝げす

きりん草心にとめてしばし歩む木の間を透けり秋の太山

望樓は秋晴の空ぬきて高し濱の子二人又一人のぼる

秋の海にたち連ねたる炭船の一帆一帆のむきのたしかさ

## アカシヤの花

松尾恒次

職員室の窓にい倚れば直に見ゆるアカシヤに花は咲きさがりたり

松並木長く續きて堤道の盡くる海なかに簀鳥は見ゆ

(養鳥遠足)

片そばの木蔭の道に大きな蝶一つ飛びて山はひそけき

(河内に遊びて)

縛られてうち臥しつゝ隙を見て強盗に食ひつきよく捕へたり

吉本君と強盗

猿轡はめられし妻は肱をもて呼鈴を押しつ宿直室に



アカシヤ集  
(四年)



安部 睦美

打水によみがへりたる草花に淡き夕日のかげのうつれる

白砂のなごさに立てばほのかなる磯の香のなつかしきかな

羽切れし赤き蜻蛉の二つ三つ籠に伏せある弟の部屋

わが名をば呼び止むるごと思はれて吹く木枯に耳すましけり

はたくと風にひらめく旗音をきつゝ室にとちこもるわれ



通りがゝりに市場よぎれば果物の香たちくる冬の店先

この朝のそゞろ寒きにおどろきて一人淋しく學び舎に行く

在りし日の友の事など思ひつゝ一人淋しく學校に行く

青空は澄みて流は清けれど濁り行くものは人心なり

街に来て貧しき人にわづかながら施したれば心嬉しも

勇ましき鈴の音冴えてひゞきけり朝まだき頃の嬉しきおとづれ

民草の願かなへりこの朝師走の風もなごやかに吹く

足取りも楽しく登校する朝行き交ふ人の顔もほゝゑむ

學び舎の歸りなるらし亡き弟に面似し人のすぎて行きたり

明日の日を心に描きやすらかに臥し得ぬ今宵はや更けゆくも

(入學試験前夜)



入澤 富美枝

外つ國の人にも今日の喜びをともに分ちてわれは祝はむ  
 天晴れて砲聲は地に轟けり皇子生まれましし今日の佳き日に  
 國民の待ちたる甲斐のあらはれて日嗣の皇子は降り給へり  
 瑞雲は日の本の空にたなびけり皇子生まれましし畏き此の日  
 畏くもわが日の本の御位を嗣がせ給はむ皇子生まれませり

井上 スミ

學舎を出づれば試験の時のみぞ思ひ出さると姉は言ふなり  
 朝あけの寒空にひびく祝砲を一つ二つとわれ數へけり  
 さし昇る朝日と共に日の皇子は<sup>ミコ</sup>大和の國を訪れ給ふ  
 君が代の歌に送られ日の丸の國旗は靜かに空に昇れり  
 うちつれて學ぶ日は後幾日と指をり語る放課後の室



白き雲いと心地よく眞二つに中開けたり秋の大空

白梅の老木のもとに立ち寄りて我が仰ぐ空青く涯なし

水仙の頃ともなりて愛でましし師の思ひ出は遠くあるかな

野山焼く白き煙はやはらかく春のみ空に上り行くかな

荷車の音かたこととのどかなり草の芽生ゆる春の村道

父ゆきてはや八年はすぎにけり永久にわかれし日を憶ふなり

わがために心つくしし亡き父を母の話にしるべばなつかし

故里の家見るごとにしのばるゝありし昔の父のおもかけ

母と二人土間にかゝみてしなびたる大根の葉をむしりたりけり

かなしみは四年の月日すでに逝きて友と別るゝ日の來たるとき



井 關 美 子

岩多き山國川の早瀬にてやさしき友は逝き給ひけり

思ひがけず逝きにし友の魂をとほに護れかし耶馬の川波

とこしへに行きける友をしのぶらむ山國川の波のさゝやき

彌榮と青空高くそびゆなり日子の御山の杉の並木は

われひとり見晴台に上り來て潮風にネクタイ吹かす心地よさ

魚 住 繁 子

心なく今日また母にさからひぬわが頑なる性ある故に

赤裸々に母のみまへに詫ぶるとき心しづかにやはらぎてゆく

習ひたるマッサージを母にわがすれば大いなる喜たゞに湧くなり

桃櫻匂へる春に入學し匂へる春に出でゆかむとす

皇子生れましてわが家に満てるなごやかさまた嬉しとて湧く笑かな



恵良八重子

奉祝燈の真下にたてる少女子は桃われの髪をゆりて笑へる

雨やみて明日は晴かと思ふ時又雨蛙なきしきり居り

さめやらぬ夢かどぞみゆ山裾に朝霞する春の曙

海峡のうづまく波を眺めつゝありし昔のゆかり思へり

ひと束のばらの花持ちてにこやかに訪ひ來し友はその花のごと

岡崎マサエ

日の御子の生れますことこのうれしさに冬木もともに萌し初めたり

空寒く窓うつ雪を眺めつゝ滿蒙の兵士いかにと思ふ

校門にて敬禮するもあとわづかと思ふこゝろのわびしかりけり

雪降りてさえぐ照す月の夜に遠くきこゆる犬のなきごゑ

初春のうすらひとけてきはやかに庭の老木の梅が香匂ふ



沖原淑子

六月の光まばゆきひる頃を白きバラソル橋わたる見ゆ

年ふればみ聲も忘れ今はたゞ白く優しき人とおぼゆる

夕潮に九十九島の風さむみ平戸島山淡陽たゞよふ

別れきし友へのたよりしたゞめつ思出つきぬみぞれふる夜は

いさゝかのわがまゝありと母去りし後にさびしく悔いてゐるかも

大石静子

亡き人の魂かへるてふ盃蘭盆に君の御魂もかへり來るらむ

初春の喜び待たでみまかりし師の初盆も今宵になりぬ

見つめゐる人のありこも知らぬげに小さき鳥はしみくゞと啼く

巡禮のま白き衣に夕闇のほのかに迫るを見送りてゐき

ひもときし漱石全集の面白く退出の鐘もきゞもらしたり



野も山もなつかしきなく枯れつくし梢に風の荒び吹くかも  
 なつかしき友のたよりを繰返し讀めばかなしくなりにけるかな  
 友達とともに語りしアカシヤの木蔭も今はたゞになつかし  
 なにさなくこゝろしづみて秋の日に野道をひとり歩むわれかも  
 わが母の飾り給ひしひな菊は紫色にほゝるみてをり

試験終へて窓より見れば足立山うき立ちてみゆ春の光に  
 商店のウインドみればそゝろにも欲しくなりたり春の新柄  
 青色の四つ葉の押葉見てあれば忘れてゐたる野べのしのばる  
 鄙に住む友を思へばわが心鳥の如くに大空をとぶ  
 夜更けて窓べに近く天みれば師の魂なるか星のまたゝく



岡本歌子

大空に轟きわたる祝砲の勢よきにわが胸はをどる

日の皇子のみこゑ高らかに生まれませば天地ともに喜びに満つ

夕暮のそゞろ歩きに鶯の初音きゝたり藪かげのみち

蛙啼く小田の夕べの月影に君ありし日の偲ばるゝかな

日嗣皇子生まれまし給ふと大空をゆるがしてひゞく祝砲の音

柏田百子

唯一人机に向ひ書讀めばすぎし四年の月日しのばる

勇ましく轟く音に思はずも双手をあげて萬歳と叫びぬ

喜びの渦卷く中にわが皇子は御健やかにおはすとぞきく

何げなく襖ひらけば母上は眼鏡をかけて本よみ給ふ

空高くひらめく國旗仰ぎ見れば嬉しき自づと胸にわき出づ



車窓より外眺むればはる／＼と續く稲田に案山子立ち並ぶ

たのしみの今日一日もはやすぎぬ遠き母にと杓子送りぬ

(宮島にて)

この清き五十鈴川にて手を淨め水底見ればこゝろしづまる

名に高き二見ヶ浦に来て見れば朝日に映ゆる岩のおごそか

さく／＼と白砂踏みて進みゆけばかたじけなさに頭下れり

(伊勢神宮)

いざ寝むと電燈消せばこほりたる月の光は窓邊よりさす

けだかしとたゞへられたる梅の花も日経ちぬれば褪せて散り行く

何かよき薫するるとて見上ぐれば頭上に白き梅の花咲く

窓邊なる水仙の花よどこしへに汝がよき香消えであれかし

校庭の寒空に立つアカシヤに芽をふく頃はわれら出でむとす



神谷松枝

大空にひやく汽笛もかるやかにわれらの汽車は門司へと走る

天守閣よりはるかに下を見下せば走る電車もマツチ箱の如し

(大阪城)

水中に立てる眞赤き大鳥居清き水面に影をうつせり

(宮島)

夜の海のデッキによりて眺むれば赤き灯影ぞなつかしまるゝ

冬枯れのさびしき庭にきそひ咲く紅白二本の山茶花のはな

川口君子

初春の澄みたる空に浮ぶ雲見れば果てなき思出の湧く

静かなる夜の家内に氣をはりて話す弟の聲のはすめり

校庭にそよ風吹きてアカシヤの葉末にゆるぐ朝あしたの日影

暖かき光を受けて縁先に我はすはりぬ日曜の午後

四年の月日住みなれ來つる學び舎に今ぞ別るゝ時は近づく



歌ごゝろさらにわき來す筆立の筆をみつめてしばしをりたり

暖かき床の中にて卒業もま近しなどゝふと考へぬ

亡き友の命日なればかげながら花など供へてありし日しのぶ

讀みかけの本ふせたれば夜の寒さ身にしみんとせまり來るなり

風のまゝに粉雪降り來るわが庭に鮮かに赤きおもとのつぶら實

## 甲斐花子

市場より歸り來るらし荷車に赤きトマトの一つぞ見ゆる

赤とんぼ眞青き空にすい〜と二つ輪をかきとびさりにけり

冬來れば春遠からじと人は言へどなか〜にして春訪れず

草原に風遊びする子らの群春もやうやう近づきにけり

静かなる山の社の境内にたき火をするか煙上れり



久良知 婦紀子

御降誕をどく報せんとかけめぐる號外配達の顔の朗らかさ

舗装路にわれ一人立ちてバス待つ間彼岸の夜の冷えたくとする

祖父母より岐れし二十五人ことごとくに集ひて魂祭する

(法事の日)

伯母逝きて五年は経れどこの従兄のさみしきかげは未だ消えざる

出でゆきて何ごとなさむ平凡に若き年月をたゞにすごすか

(卒業近し)

藏内 國榮

此の頃の春らしき陽を身にうけてわが卒業のことのみ思はる

われ友と共に學ひしふるき舍も今となりてはなつかしく目に見ゆ

學び舍を巢立つといふはうれしくも又悲しくも思はるるなり

放課後のアカシヤの木にもたれ居る友ども二人何を語るや

停留所の八時五分にせまりたる時計にらみてわれ急ぎ來つ



たふとさは杉の木立にみちくく踏みゆく靴の音もしづけし

そのかみに殿上人のゆきかひし都大路を自動車走らす

み佛に詣づる朝や秋空に菊の香高く匂ひのぼれり

わが文を手にとり上げてにこやかにほゝゑみ給ふ母をおもへり

お土産のたこがびんくくどびはねて今日の疲れを休めてくれる

朝まだきひとり教室に来てみれば友なき室に梅の香れり

一年生の無邪氣に笑ふ顔みればおのが幼きころぞ偲ばるる

わが植ゑし花壇に足をふみいれて赤きひなぎくそとつみて見ぬ

枯れ果てし木々の梢のすき間よりもるゝ満月の影もさやけし

楽しみは遠くはなれし親友の誠心こもる文を見るとき



ほうせん花の種にさやれば快き音立て、散りぬ秋近き庭

磁器の如く光るざくろの實の生れる青き小枝の危ぶまるゝも

無言にて御墓を淨め無言にておろがみつゝも涙ながるゝ

顧みればわれを送りて兄上は吹雪の中にたゝすみ給ふ

微妙なる人のこゝろのわづらひにかゝはらずして生きむと思ふ

うつひさすみやこ行くてふ我が友の立つ此の朝の風のつめたき

七日の旅行に行くど友達の勇みて言ふをうなづきて聞く

學び舎に夙に行きつゝ友達と皇子生まれましゝをうれしみ合へり

菅公のすまはれしてふ榎寺のあたりしづけし田にかこまれて

みつめゐる地にアカシヤの花白くあしたの庭にこゝだ散り來ぬ



君が代をきゝて思はずはね起きつラヂオの前にとんで行きたり

日の御子の御降誕をば祝しつゝ國の彌榮祈りあふなり

新年の初鶯も日の御子の御降誕をば喜びあへり

叡山に登りて見れば眼の下にゆるくたたへし琵琶の湖

どこそなく威嚴を保ち蓮葉に坐りましたる奈良の大佛

新しく塗りかへられしわが部屋の眞白き壁の晝のあかるさ

しんくゝと雪降る夜に母上と火鉢かこみて父上を待つ

ひさぐゝに歩みて見たりなつかしきわが故郷の島の細みち

ひさぐゝに郷にかへればわが町に新しき家多く建ちたり

新しきわが本箱に色々の書物は多く立ちならびたり



故郷にわが身思へる母君に旅の疲れのなきを報らせつ

懐しき二見ヶ浦を後にして今わが汽車は京に向へり

買物に宿を出づれば京の街の出あひがしらに友はほゝゑむ

冷たさの身にひし／＼とせまり来て庭の木立の秋ふかきかな

母上といさかひし後のさびしさよたゞゆるしませと心に祈る

末永ミチ子

千疊閣に上れば夕闇せまり来て港の灯またたきてをり

(宮島)

しづもれる神明造りのみ社は杉の梢に見えそめにけり

雨降りてみ堂暗きにぬかづきて母のたまひし賽錢上げたり

一人居はさみしきものよ音すれば人訪ひしかこのぞき見にけり

炎天に乾しし大豆の音立てゝ勢よくもとび出づるかな



須藤 富美

蟬取りを作りてもらふ吾弟らの見入る瞳のもどかしげなる

さびしきは一人時計のこち／＼と音するをさく夜更なりけり

窓あくれば涼しき風の吹きすぎて机上の紙のはら／＼と散る

庭先をそゝろ歩けば打水に涼しさを増す夏の夕暮

日章旗今上りぬとアナウンサー言ひし言葉に涙にじめり

末永江水子

何事かよろこばしげに子らのこゑひとときひときてあとのしづけさ

妹は泣くのを止めてゆるやかな緋鯉の群のうごきを見てゐる

くま笹の生ひ繁りたる深山路をたどりてゆけばさやに風吹く

深山路を行けば小さき秋草に笹龍膽の花ゆれてをり

龍膽の濃紫の目にしみて秋の日射のいとど淋しき



園田美代

卒業を前にひかへて校庭のあかしや見れば涙落ちたり

今朝見れば真白き線の長々どつゞくコートのならつかしきかな

(体育日)

教室の隅よりおこる笑ひ聲何を語りてよるこぶならむ

海岸の冷たき風に吹かれつゝ日輪沈む山の端を見る

木枯に吹きまくられて芽も出さず小さくなりる草木のあはれさ

宗スミ子

母君は四國遍路に立たれしがつゝがなかれと神に祈れり

山寺の遠くかすめる鐘の音は我を静かにもの思はする

消え残る雪の下より草の芽は早見えそめて春もまぢかし

すくくど庭の若草萌はいづる春のおとづれ我が侍ちてをり

鐘の音も寒く凍りて山寺の淋しき夜は師を思ふかな



## 夕 日 影

高山美代子

日に映ゆる蜜柑の色も柔らかく風さへ早やも春めきてあり

夕闇のせまりてあれば一入に鮮かに見ゆ白き山茶花

夕日影華やかなりしがやゝに消えさびしさのみが後に残れり

雑草に交りて咲けるりんどうの薄紫の色の侘しさ

明方の雨にけぶりし小庭邊のその静けさに我立ちにけり

高柳 絢子

日嗣皇子の生れ給ひしよき朝師走の空はすみわたりたり

心より待ち侘びてありし日の皇子を今朝こそ仰ぐ國のよろこび

號外の文字しみぐと胸に迫り眼かすめり今日のよき朝

あたゝかき頬のさはりに目ひらけば父枕べに熱を見給ふ

(病 中)

あはれあはれ四年の春を送り來し學び舎と今わかれむと思へば



はるくくと遠き故郷を夢みつゝ頭並ぶる旅枕かな

夜の帳しづかにあけてあかくと輝き出づる二見の日出

歸り待つ父母の笑顔を想ひつゝ土産の品をわが眺めをり

車窓より見ゆる山かげに馬鈴薯のましろき花は咲きしづもれり

山のごと乾草つみし馬車一つしづかなる野べの日だまりを行く

萬歳の聲は天下に満ち満ちて人も小鳥も喜びあへり

日の皇子みこの生れたまひし我が國は彌榮えなむ礎固く

弟と街を歩けば軒並に遠く遙かに旗の行列

住馴れし故郷離れしわれは今あづまの方を朝夕に見る

卒業もあと幾日と指折れば何とはなしに涙ぐまるゝ



喜びに満ちあふれたる講堂に君が代つよくひびきわたれり

國民の誰も願ひし日嗣皇子の今日めでたくも生れたまへり

せき一つする者もなく少女らは黒板の字をにらみてるたり

(考査の日)

歌詠めど仰せられたりわれら皆困じ果てつゝ空を眺めぬ

森閑とせし教室に師の君の靴の音のみ強くきこゆる

山路来て木の下蔭にいこひをれば青葉をわたる風のすゞしき

今日もまたわがつくりたる手料理の夕食の膳に上るうれしき

ふと見れば山の片端に月いでぬ書物を伏せてしばし眺むる

コバルトの空にかげなしひばりなく聲をきゝつゝ着物ほすなり

木の葉一つひらひらまひて池に落ち風にふかれてつとはしりゆく



田原稔子

愛らしき服をまとひし幼子は母の腕にいだかれてゆく

弟は汽車の遊びに餘念なく敷居の上を走らせてをり

コバルトに晴れたる空を飛行機は蜻蛉のごとくどびゆきにけり

さしまねく母の手もとにみどり子のより来る様の愛らしきかな

水枯れし川べり行けばかさくどさやく如く枯葦のなる

寺尾美代子

學校のかへりに今日も夕暮れぬ夕餉とゝのへ母は待つらむ

ガラス窓に淋しくみぞれの音なりて今日の日も暮れゆきにけり

五月雨のわづかの晴間裏庭の青葉にそよぐ風ぞすゞしき

淋しげに柱につられしカレンダーの残り少く年暮れむとす

天國に旅立ち給ひし師の君のやすき眠をわれは祈れり



徳田良江

なつかしき父のまぼろし春の夜に蓮華にのりてわれに近づく  
 なつかしき姉につれられ村祭の田舎にあこがれわれは來りぬ  
 田舎路友とならびて歩みゆけば薄が原に鐘の音きこゆ  
 われ一人室中にゐて本讀めば窓にさら／＼雪の音する、  
 なき父を思ひしたひて昨夜また夢の國へとあこがれゆきぬ

中原トキハ

日曜日かぞへ待ちたる老母の白髪ぬきつゝ思ふこと多し  
 あたゝかき小春日和の山坂の中ほどに來て羽織ぬぎたり  
 來年もふたゝびわが家に來よと言ひて巢立つ燕を見送りにけり  
 山田なる島の隅の菜の花も春を忘れず花咲きにけり  
 毛氈をしきたる如きれんげ草の色濃き所えらびて坐る



丹生美代子

乃木神社出づれば藤の花匂ふたのしき初夏の遠足の日よ

たのしさに満ちて長府につきけるにはやも別れをつけて立ち去る

青空に吸はるゝ如くのぼりゆく赤き風船唯一つ見ゆ

いつしかに蛙の聲も聞きなれて田の面を吹き來る風の涼しき

夏草の茂みの中に晝顔の蔓はからみて花咲きにけり

野口かつ子

海に陽はすでに落ちたり空にひく朱の一はけの色うつりつゝ

人多き京都の街の行きずりに見し制服のかげなつかしき

船は今速度増しけむぬば玉の暗より吹き來る風のはげしき

ともに泣きともに遊びし學び舎と別れむ時ははやせまり來つ

母の手に引かれて入りし小學校を出でゝよりはや四年經にけり



ちら／＼と粉雪降れる此の朝急ぎて家を出でにけるかな  
心せきて家にかへれば妹の笑みて迎ふる顔の親しさ

青澄める空を眺めて學校へおのづと急ぐ心かるやか

伊藤公と李鴻章との會見の行はれしといふ春帆樓に來つ

如月のましろき雪にとざされし山眺めつゝアルプスを思ふ

水仙の花しめやかに匂ひくるこの部屋ぬちでまなぶもわづか

うれしきも悲しきことも思はれてすぎし月日のなつかしきかな

まなびやの窓より見ゆる山やきののぼる煙のわびしかりけり

友達と後幾日と數ふれば後もわづかになりけるかな

春立ちてまなびやあとにする友とたのしき話に時經つをしらす



林 千 代

ともにゐし兄と別れてこの部屋のひろく淋しくなりしこの頃  
 からたちの枯れたるとげに光る日の心いたきまで冬晴れにけり  
 鉢植の小さきほゝすき赤らみて風秋らしき頃となりたり  
 朝露のしつとりと置く田の畔を野菜車のかたことと行く  
 いちじるく疲れの見ゆる庭草にしらくと照る夏日わびしも

半 田 笑 子

子を叱るかん高き聲わが胸に痛くひゞき来る小夜更の街  
 汽車の煙地をはひゆきて枯草にふれては消ゆる吸はるゝ如く  
 學び舎の芝生の上に腹ばひてともに語りぬ幼き頃を  
 氷雨降り山脈白くおほひたり君逝きし日もかゝる日なりき  
 一列の銀杏の並木霜枯れて道ゆく人の寒けくぞ見ゆ



廣野 初枝

心こめし裏の畑の霜の間になにの芽か赤き芽の出でにけり

朝まだき宿をたちいでみ社にわれ詣で來つたのしき初旅

夕暮れて小雨となりぬ背戸に出で、一人さびしく空を見てをり

むづかる子をひざに抱きつゝ縁先の山吹の花眺めをる母

綿雪の降りしく中を寒雀何處へ行くか鳴きわたりゆく

福森 三和子

怨みなく悔なく生きむ人の世の辛さに勝ちて小さくともわれは

辛きことは日記に書かむ辛き日とひとすぢに書くわれとなりけり

炭燃ゆる音のしづかに聞ゆなり今日ありしことわれは記さむ

とむらひの列のみだれて出でにけりぬかるみみちの露路の家より

冬の日のはやくろひぬ妹に請はるゝまゝにもの語りしぬ



松木正子

うす墨を流しし如き故郷の時雨の山は繪にも似るかな

さなきだに暮れて淋しき秋の夜をも思はするこぼろぎのこゑ

山里は秋も更けしか道のべの千草の花の老いにけるかな

うちつれてこの海岸を飛ぶ鳥のなく音もさびし秋の暮れゆく

さくら花いつしか散りて暮れてゆく春は若葉の色に深みぬ

町田カズエ

夕鳥なきつれかへるこゑあはれ西の山べは夕がすみたり

朝風に吹かれこぼるゝ齒みがき粉庭の青草にましろにぞ散る

朝風ぎの海にむかひて言葉なく冷き眞砂ふみしめにけり

わが室に昨日さしたる沈丁花今朝起きたれば花こぼれをり

教室より見る向山のいたゞきに雪白々と今朝は積れり



松崎直子

旅に行く兄と姉とを見送りし夜更の驛はわびしかりけり  
 音立てゝミシン踏むまで育ちたる妹見れば我はうれしも  
 すべもなく淋しき一日しみぐとわれ筆とりて歌書きて見る  
 旅に来て白き小犬を見つけたり何とはなしに心うごきぬ  
 母なけれど素直に育つ妹見れば涙ぐまれていちらしきかな

松尾政子

なつかしき父の故郷あこがれて祭りの佐賀に伴はれ來ぬ  
 わが父の思出ふかき故郷の佐賀の街をばものがたりゆく  
 その上の武士たちを引き立てし浮立うきだてのさまをあかず眺むる  
 學び舎のこのなつかしきアカシヤも新なる地に運ばれゆかむ  
 新しく世に出でむとす波立てる心おさへて行かむと思ふ  
 (卒業ま近し)



松尾 信子

秋の日を姉妹つれだち行く道に通し後を秋の風行く

新しき池のほとりに芽ばえたるやはらかき草は何を思へる

水仙の花も咲きぬる春なれど花にたとへし君はるまさず

姉よりのながき便のその中に卒業といふ文字のをかしき

かすかなる光をはなつ星見れば逝きましゝ君のほゝるみ浮ぶ

丸尾 マサエ

今日もまたすぎし事など思ひ出し一人ほゝるむ窓べによりて

淋しさに室の窓をばおしひらき夕暮時の足立山見る

なつかしき四年の月日顧みれば苦樂の思ひ一時にぞ湧く

夕暮に窓をひらきて空見れば夕日は落ちゆく山の彼方に

すぎし日に青葉かをれるアカシヤも今は淋しく冬空に立つ



電車より外眺むれば雨にぬれて菅笠二つ並び行くなり

雨だれの音しめやかにきこえるこの夜静かに窓に書よむ

床につきねむれぬまゝに雨垂れの音を淋しく聞きてゐにけり

梅の花ほのかに香る我が庭にやさしき友の文を受取る

今日もまた涙こぼれぬ母上の心づくしの辨當を見て

わが書にいたづらせしを叱りたれど寝顔をみれば心悔ゆるも

アカシヤの木蔭に憩ひいでゆかむ日をし思へば悲しみ覺ゆ

くやしきのあまりに姉といさかひてあとの心はさびしかりけり

妹の遠足土産ひろぐれば博多煎餅ころげいでたり

卒業も近しと思へば一日々々経ちゆく日數惜しまれてならぬ



大君の國榮えよと日の皇子みこの下り給ひぬ今日けふのよき日に

山深き古きみ寺の山門に紅葉色づき秋たけにけり

月ゆきてすぎこし方ぞなつかしき此の學舎にはや別れむとす

春衣ぬふ針持つ手先ひえくくと霜降る夜の時はすぎゆく

手細工に心うちこむる友どちのやさしきほくに髪のみだるる

## 南國子

千切れ雲處々にたゞよひて一つは山に影おとし居り

指折りて待ちに待ちたる今日此の日日嗣の皇子は生れ給へり

天地も雲も黄金の朝光も總べての物がかがやきわたる

静かなる風にふかれて白き雲北へ北へと流れ行くかな

別れむと思へば悲し幾年もあのアカシヤを思ひ出すらむ



村上和

君が代の皇子生れますと冬の朝に號外の鈴さやけくひやく  
 賤が家も日嗣の皇子を壽ぎて風にひらめく日章旗かな  
 君が代の皇子萬歳を壽ぎて提燈行列大通を行く  
 奉祝の行列ゆくを眺むれば非常時風景あらはれるるかも  
 友どちは卒業するを喜べどわれは何故かかなしく思ゆ

逝く秋

(研究科) 村田 静

朝夕のせんじ薬の濃き茶色のどに冷たく秋深み行くも  
 朝顔の花一二輪落ちずしてうなだれて居し秋深む夕  
 粧ひて年賀客行くこの朝獨り立ち居て窓に見るかも  
 何處より春の氣配のするらしき猫柳等水がめに在り  
 如月の雲間に蒼の空出でぬ寒の太鼓も何時か止みたり



霜

柱

(研究科)

村田五百子

時雨して秋逝きにけり珊瑚樹の濃き紅の實もこぼれつゝ

秋雨の筑紫山なみ曇りていでゆの煙とまがふ白霧

霜柱の小さきながらも立ち居しに心にとめて足踏みしてみぬ

枕して聞きにし春の宵雨の音の静けさ更けゆくあたり

春近しわが日の皇子は生まれましぬこのよろこびは蒼空に溢るゝ

名生 晴子

日出づるに魁け給ひて生れませる日嗣の皇子は幸くましませ

我が面をうかゞふ如く見つめたる母の瞳の身に泌みてうれし

わが額に憂をこめてさはり見る母の手今宵いみじくぬくき

紅椿咲けるを見つけれ一人亡き師の君の想ひ出に泣く

ほのぼのと心つかれてありにけり春雨の音静かなる宵



毛利 昭子

君がたびしあさがほの鉢教室に置き忘れきぬ花咲きをらむ

玄海の風は涼しきひとりをるこの教室にたえず吹き来て

この電車濱邊まはれり潮風のさつと吹ききてたゞに涼しき

いつも見て通る垣根の朝顔の今朝はましろき花さきてをり

いつしらすなまけるにけりかくありて吾が行く道ははるけきものを

森井 春子

遠白く靄の包みし足立山の上ゆほのふ、明けて來にけり

なつかしき友の書きたる文見つつそらに思ふ故郷の街を

母とわれ團子作れる傍に來て兄も弟もつまみどりゆく

妹の可愛きことを言ひをるも淋しと思ふ父なき子ごと

目をふせてときをり思ふ父君が生返りなばうれしかるらむ



## 早 春

(研究科) 山 時 富 子

早春のこの日だまりの風にやせた枝の細りを仰ぎ見てゐる

雲は風に散りて静かな晝の空煙火は遠く消えたるを見し

縁白き月を過りて雲早し桐の梢を見上げつつ通る

夜空静かに電波流れてゐるならむ月のアンテナゆれく光る

ほのぼのと聞きて歩まむ寒空の夜を湧き出づる街の騒音

山 田 澄 子

硝子戸を洩るゝ日ざしにテーブルの鉢の草花一つ開きぬ

やがてわれこの學び舎を出でゆかむ破れし窓のなつかしきかな

卒業もま近しと思ひいそしめば友の戀しく師のなつかしき

弟妹のねしづまりたるこのよふけ母のみひとり針はこび給ふ

勉強の疲れのひまにふと父のありしその日の楽しさぞ思ふ



朝日子の昇るにやあらむ海へだつる山の頂白みそめたり

力満てり入り来る船も行く汽車も道行く人も春のあしたは

わが電車は早春の道を走りをりうなじさす陽にあたゝかさ覺ゆ

西日射すわがさ庭べはうす寒し紅椿の花音なく落ちぬ

垣根ごしに見ゆる白梅清らけし慕はしき友の心にも似て

友どちの大いなる鞆見るたびに旅行に行けぬを情なく思ふ

チンドンや来れば泣きやみ手をのばし背の妹笑ひ出すなり

新しき母校の庭にたゝすめば蘇鐵の廣葉の思出ふかし

(小學校にて)

見わたせば瓦屋根ま白にぞ降りつもりたる今朝の此の雪

町の辻千人針の老人を車上の婦人なぐさめて行く



米原トミ子

風吹けば杜の銀杏に奉納の布はためきて木の葉ゆるゝも

眞夜中に眼をさましたるわが耳にかすかに聞ゆる犬の遠吠え

ねむる子のエプロンとればころ／＼と赤き草の實ころび出にけり

去りゆきし君の瞳の忘れず青き月夜に今日も偲びぬ

今日もまた寂しく暮れぬ病床に寂しき虫の聲をきゝつゝ

吉永敏子

いつしかに散りつもりたる庭先の落葉の上に霜のおきけり

あこがれし奈良の都の池水にうつる小鹿の姿愛らし

元日の曉つぐる鶏の音も今朝は常よりうれしかりけり

花嫁の衣裳つけたる姉上に辛棒せよと父ののたまふ

嫁ぎゆく我が姉君よ幸多き君が未來を幸くましますせ



吉本和子

雨の音止みしと少し戸をくれば霰こぼして小鳥飛び立つ

母がむく林檎の傍に妹らは丹の頬ならべその手見まもる

亡き姉の御前にぬかづき七年の昔を偲びて涙はにじむ

わが室の窓より見ゆる梅の木に雪真白にぞ降りかゝりたる

四年を楽しく過しし學び舎に今を限りと別るゝ淋しさ

米田島子

内海の青海原をながめつゝ電車にゆらるゝ心地長閑けし

うまさき物あるにつけても兄上に差上げたしと願へごすべなき

秋なれば日頃すくなき母そはの食の進むも嬉しかりける

樟腦の香しみたる冬服に急ぎ着變へて鏡見に行く

何故か定かならざる心地あり卒業迫りし此頃のわれ



寒  
椿  
集  
(三  
年)



## 青木ツヤ子

はばまれて流るゝ川に紅のもみぢ散り來て諸鳥の鳴く

空青くダリヤの花の燃え立ちて眞晝の窓に秋深みたり

日はうらゝ淺きみどりの草原に牛のまばらにたはむれてをり

露しげき小道を行けばすがくし松のうれ間に青空の見ゆ

ほのかなるかほりに足をとどむればフリジャの花に風の渡れり



ふみ讀める友のかたへの白百合の床しき香り室にみちけり  
 丈長き日影を踏みつ人夫等は黙々として土を運べり

冬枯の野中の柿に身をよせていとも淋しく口笛を吹く

けさ見ればうすむらさきにかすみけりつねにめなれし雪の遠山  
 門ごとにつくるだるまの敷そひぬ雪かきはらふ市のあけぼの

床すれの痛みをさすりさすりつゝ夜更けて一人眠れざりけり

雨あとの庭は明るし青葉みな露を持ちつゝ陽に照らされて

松原の岸より見れば静かなる海面に白くかもめは浮ぶ

陽の色の春めき来る花園に日毎にのびる黄水仙かも

訪ね來し家に人居すひつそりと草食ふ牛の氣配がするも



大我節子

こぞの春押花にせしすみれをばとり出し見れば色あせてをり  
 さくくゝと濱邊づたひにあるき來ぬ足あとながく残りけるかな  
 兩の手にこぼるゝばかり摘みし花に顔をうづめてその香をかぎぬ  
 夜のふけをゆあみし居れば浴室の隅にころゝとなく蟲のあはれ  
 おほらかに日にむきて咲くひまはりのつよき黄色に心ひかるゝ

岡野榮美子

アカシヤの葉のなきあと枝に蓑蟲の淋しく下る冬の夕ぐれ  
 フリジャの眞白き花を見るにつけ遠く離れし友の想はる  
 静かなる夜半に一人夢さめて弟の安き寝顔をのぞく  
 暖き春風吹きて福壽草皆ほころびぬ庭の日ざしに  
 はたらきてくらし助くる我友の身にくらべ見る我身の幸を



河村 砂子

露おける野中の路を歩き行けばかすかに匂ふ野茨の花

山の家のおろりにつりし自在鍵珍らしければ手にふれて見つ

雪ふれる路を辿りつ來し山のいぶせき小屋にゐろり火明るし

露の臺を喜ぶ子等に暖き春の日影ぞうらゝかにさす

あかつきのしじまを破りいさましき出征兵を送るこゑく

米倉 した恵

二月の寒きに勝ちて蓄をもつ庭の古木も春を告ぐるかな

なつかしき友のよこししこのたより開きて眺むる心うれしき

木枯に葉はことくくうらがれしきびしき庭を眺め入るなり

竹棹に干し忘れたる白足袋に今宵明るく月さして居り

天地の光さし出づる此の朝日嗣の御子は生れ給ひぬ



神山小枝子

冬枯の中に山茶花花咲きて春まち顔の姿床しき

足立山雪積みにける曉に襟元寒く風わたるかも

夕ぐれの風に送られてたえぐに鐘の音寒く身にはしむなり

思ひやる心は海山わたれども文しやらねば知らずやあるらん

浴槽よりふと見あぐれば窓ごしの空にすみたる寒月のいろ

鈴木 薫

雨の音聞きてし居ればおのづからとつぎし姉の姿しのぼる

行きずりにふと見し人の横顔のとつぎし姉の面影に似て

うちあふぐ帆柱山の大峯に今日かゞやける奉祝の旗

面白き話のときれいそがしく我は火鉢に火をつぎにけり

明日になればほころぶらしき水仙に時雨静かにふりそゝぎたり



武谷千歳

川の邊の草の繁みにほそぼそと鳴く蟲のあり夏の夕ぐれ

窓の邊に紫にはふ紫陽花の雨にぬれつゝそよぎてをるも

早蕨に宿れる露の白玉の風にゆれく光る長閑さ

散る梅にその香もとめて見上ぐればかたむく月の影あはれなり

日の皇子の生まれましけるこの春に會へる我が身のいとどうれしき

津田ナツ子

氷雨ふる町の舗道に店々の灯影明るくぬれて輝く

ひとしきりあれし夜風のすぎゆけば犬の遠吠また聞えくる

わが家路を思へば遠し野末には灯火見えて夕闇せまる

晝の間はありとも見えぬ山の家の夕となれば灯ともる嬉しさ

うすぐらき坂下りゆけばはなやかなる燈火明るき町に出でにけり



中川よしゑ

心なく窓邊を見れば春淺く花のつばみはほころびにけり

夕暮に西なる空を眺むれば赤き雲のみあちこちにとぶ

喜びに満ち溢れたるや今日の日を日の丸かざして祝ひまつらん

勇ましき首途の君を見送りてしばしホームにたゝすみにけり

我が友の野邊の送りもはやすみて夜空に星のまたゝきにけり

長岡智恵子

照りそゝぐ春日に羽を光らせて水際を歩む何の鳥ども

久しぶり師の君とへばあまりにも衰へませる御すがたかな

若草の芽生えさ青き色どりを縫ひて流るゝ水のあかるき

春雨の土に芽生えし水仙は伸びんと急ぐ風情もしるき

沈丁花今年も春に先立ちてよき香たゝふる老木愛しき



畑間イヨ子

谷間より炭焼く煙ほそくと青空さして立上るかな

すくくと勢よくも立竝ぶ杉の木の間に青空の見ゆ

庭近き隣の家のとタン屋根音さわがしく霰ふるなり

ふり上げし線路工夫のつるばしのつめたく光る夕ぐれのそら

冬の日の寒き濱邊のしほ風に日の丸の旗ひらめきて見ゆ

持松 信子

小春日を裏の空地にたはむれて遊べる子等の聲聞ねくる

ひろくし枯草原にふと見たり下もえ草の青く芽ふける

帆柱の山の白雪消えはてゝ日射しうらゝに春近づけり

垂乳根の母となり得てたらひつゝみどり兒抱ける姉上をおもふ

暖けき日射の中にゆらくと揺ぐ柳の若芽もえ立つ



守友 伸子

冬の月今はのぼりぬ白々と雪ふりつめる樹々の静けさ

川べりの柳の若芽萌え出で、春や近しとほゝゑまれけり

今日も又小窓をもれてむせぶごと静かに聞ゆるヴァイオリンの音

客去りて黒き器にのこりたる蜜柑の色の暖きかな

春近き遠の山なみ山ひだの雪の白きにひかげ隈なく

山口 博子

むしろ敷き戯れし野に今日みればはや新しき家の建ちたり

練習を終へて去り行く學舎のコーの上に早や月のある

長々と続く山路の静けさよ笹の繁りて晝も小暗き

松の枝のあひまゝに海のごと深く澄みたる冬の青空

人すまぬ荒れたる小屋の白かべに赤きつたの葉からみゐるかな



吉田 貞子

海と空一つにかすむあさもやの中より聞ゆさゞなみの音

静かなる海を包みし夕もやにたゞよふ小舟もたゞ一つあり

なごさ打つ波にかもめの飛び立ちぬつゞきて見ゆる真砂の白き

寒月に匂へる梅のけだかさよ寒さ忘れて窓開けにけり

月影に梅のにはへる庭先をめでつゝ今宵そゞろ歩きぬ

梶子集 (二年)



## 赤染美智子

さ夜更けを豫習し居れば傍の炭火くづるゝ音の聞ゆる

焙じ方よろしければと稱へつゝ浮き上り居る茶柱をふく

朝まだき焚火を圍む子等の顔赤々とほてり居たりき

新しき下駄の鼻緒をゆるめつゝ初春らしき氣に浸りけり

紫の地圖に引きつゝフランスの葡萄の多きに吾は驚く



井上芳子

その昔ひぬもす遊び戯れて暮しゝことの懐しきかな

故もなく毛糸むしりてうなだるゝ母の亡き子の哀なりけり

子の爲に命もすつる世の母のその心こそ貴かりけれ

今は亡き姉を偲びてコスモスの押花にそと口づけて見ぬ

庭隅の槭の梢葉は落ちて吹く木枯に静かに揺らぐ

桶川恵美子

雀の足の間には菱の芽の青白くゆれる霜の朝

川面に柳の小枝さらさらと散り行く小鮎の面白き

日の丸のはたくとひるがへる朝すがくしく嬉し

朝まだき氷のはりし手水鉢の下南天の赤く雪白し

雀の止まりし千竿の緒かまどの煙ゆらく上る



北澤和代

地理教室の窓より下を眺むれば鐵砲持ちて子等遊び居り

風船の行方眺めつゝ幼子は眞晝間の太陽ひに両手かざしぬ

原始林の傍の細道歩み行けば緑の葉影に赤き鳥居見ゆ

(奈良にて)

登りつめて腰を下せばあたりたゞひつそりとして薄なびけり

木枯の吹く川べりに落ちて居る連戦連勝の號外の文字

北島昌子

母上のこと偲びつゝ薄暗き光の下に手紙認む

遙かなる海原に浮ぶ帆掛船見れば偲ばゆ母上のこと

赤青黄色とりくゝの水着の上に光輝く海邊の太陽

夏の陽の照りつく中を籠提げて魚取りに行く子供達かな

大空に飛び行く雁を數へ居れば何故とはなしに淋しくなりぬ



木村 伸子

夕もやに洞海灣は包まれて紅きともし火ほの霞み見ゆ

うす暗き山路にかゝりふと見れば月影淡く天心にあり

宵開の迫れる山にさくくくと靴の音のみ淋しく響く

あはれにも淋しかりけり山に聞く入相の鐘の幽かな餘韻

一本のラムネに渴をいやしつゝ喘ぎて登る阿蘇の山路

木村 照子

湯上りにうちは使へば仄かにも浴衣の紺の匂ひ來れり

弟の眠りし姿見て居ればいびきの音のかすかに聞ゆ

秋空に一本立てる梅の木に蓑蟲一つさがれるが見ゆ

滿蒙の勇士の姿思はせて訓練生の今し通れり

うづ高く積上げられし石炭に雪かどばかり霜のおりたる



津田 朗子

友達の花は揃ひて咲きたるにわが花は未だ咲かぬが悲し

(温室の櫻草)

咲く日をば待ちわびたりし温室の我櫻草今朝一つ咲きぬ

しん／＼と夜は更け行きて拍子木の音の淋しく聞え來るかな

子守歌靜かに聞ゆる此の夕我は幼時を思ひ出しけり

冬枯の小徑を行けば子供等は寒さも知らず遊び戯る

藤 榮 枝

さし昇る朝日を受けし不二の峯氣高くも亦美しきかな

萬代の雪を戴く不二の嶺ぞゆるがぬ御代の姿なりける

山と見え島とも見ゆる明方の雲の姿の珍らしきかな

亡き友の影偲びつゝしづ／＼と我は下りぬ英彦の山路

我も亦大和島根のおみなへしいざやつくさん國のみために



豊原みどり

眞白なる霜柱踏み颯爽と友と二人で語り行くなり

更けし夜に静けさ破りて聞え來るピアノの音に我はきゝほる

霰降る此の校庭に朝會のラヂオ体操する手凍ねぬ

肩を組み仲よくうつりし寫眞見て友ありし日を思ひ出しぬ

様々の顔してうつるアルバムの寫眞眺めて一人微笑む

内藤 静子

咲きそめしこのコスモスの花かげに一人佇む乙女子のあり

文机の京人形の影さへも雨の降る夜は寂しげに見ゆ

冬の夜煖爐のそばに唯一人シエクスピヤに讀み耽けるかな

太陽はほの光りつゝ昇りけり白雪積る此の山頂に

紫の宵闇せまる庭さきにくつきり浮ぶ夕顔の花



永見行惠

冷たしと思ひて見れば薄氷こゝの池面をはりつめてをり

友に贈る文書き終りふと見れば窓下に赤しひな菊の花

雑草の間々に生出でしアネモネの芽は縮りて居り

敷藁に置きたる霜のきら／＼と輝く朝の美しきかな

犬ころの荒しゝ庭を母上は小言言ひつゝ始末なし居り

中島和賀子

友達と一つの傘にぎごちなく這入りて歸る俄雨の日

片附くる戸棚の隅の櫻貝ほのかに残る海邊のかほり

初春のほの暖かき縁側に取残されし干柿のあり

三月越し病み居る母は醫師よりの入浴の許待ち佗びて居り

我前を通り過ぎたる振袖の別れし友によく似たるかな



中村智子

如月の寒き夕の大空に冴え渡りたる満月の影

木枯のふきしく野邊に夕もやのこめて木立を包みたりけり

積りたる雪照らしつゝ静々と足立の峰に月は昇れり

氷雨降る此の夕ぐれにさ庭べの木々の梢の淋しく動く

庭隅に咲き誇り居る白梅の氣高き姿好もしきかな

奈須ヨシエ

朝霧に香たゞよふ白菊を折らんとすれば露のこぼるゝ

去年までは祖父と眺めし此の梅を一人眺むる淋しき心

はらくと散り行く梅を眺むれば梅を愛せし祖父の偲ばる

人形を負ひたる妹は母上の膝に抱かれて乳飲みて居り

いさかひの後の淋しさ二人とも黙したるまゝ空を見て居り



野堀 鈴子

若草に一人臥し居ればそよ／＼と吹く春風の心地よきかな  
 木枯しの吹きしく中を少年の豆腐賣り行く姿いちらし  
 起き出でて顔洗はんと水がめを見れば氷のはりつめて居り  
 腕時計買ひて貰ひぬ嬉しさに床の中にて掛けて見にけり  
 目に見えてその芽伸び行く水仙にたゞ寒々と冬の太陽射せり

長谷川 貞子

しん／＼と更け行く夜半に唯一人目覺めて居れば淋しさ身に泌む  
 世にまさぬ友とは知れど行きずりの人の姿を振りかへり見ぬ  
 恐ろしき夢に驚き目覺むれば父のいびきの高らかに聞ゆ  
 朝まだき野路を急げば眞向ひの足立の山は黒くきは立つ  
 あかつきの人通りなき道行けば我が靴音のあたりに響く



一人居の淋しきまゝにピアノ弾き父母の歸りを待ちわびにけり  
 なつかしき友の便りの封切りて息もせはしく讀み耽りたり  
 待ちわびし友の便りを日あたりのよき窓邊にて讀むは樂しき  
 アルバムの頁を繰ればつぎ／＼に幼き頃の思ひ出さるゝ  
 久々に祖父のゐませる奥津城に額づける祖母に涙ありけり

山合に炭焼小屋か人住むか白き煙の日毎に昇る  
 谷間なる百合の一本氣高くも瀧の沫に打たれつゝ咲く  
 軽々と針の手運ぶ嬉しさよ母の羽織の出来ると思へば  
 冬枯の此の庭さきにはほの香る白梅の花の懐しきかな  
 柿の實は實りたれども猿蟹の話語れる母はいまさず



凍りたる畑に萌え居る麥の芽に若き力の溢れ居るかな

我のみの知るさゝやかな喜は父のみ魂に花捧ぐる時

香のにほひかそけく漾ふ佛壇に父の位牌のかゞやけるかな

暮れて行く空も冷く凍てゝますじつと動かぬ紫の雲

春菊と蠶豆ばかり青々と裏の畑に萌えてゐる冬の空

美しく飾りし雛の前に坐し過ぎし昔の物語する

とく起きて顔洗ひつゝ眺むれば庭の本草は冬枯れてあり

留守居する夜の寒さの身にしみて火鉢の炭をかき起すかな

葉の落ちし梢々に柿の實の玉の如くに光れるが見ゆ

雪の降る今宵淋しく街行きて髪にかゝれる雪を拂へり



牧村秀子

雨霽れて緑したゝるアカシヤの木かげに友と語るも樂し

風に散るアカシヤの花身に浴びて笑ひさゞめく乙女子の群

ありし日の友と遊びし夢さめて我は淋しく涙しにけり

朝早く清瀧宮に詣づれば椿の花の淋しく散りぬ

美しき昔思へば片手なき京人形の懐しきかな

水之江マヌエ

椰子茂る葉蔭に憩ふ土人等の樂しき生活羨しトモと思へり

(映畫を觀て)

忘れし此の花園は荒れ果て、我物顔に雜草茂る

心より慰めくるゝ母上の優しき心何時も變らず

別とて君の賜ひし洋装の花嫁人形我にはゝ笑む

いさかひて飯も食べずに泣き居ればうごん屋の聲高らかに聞ゆ



明方の電信線に雀等の小さき顔の並べるが見ゆ

逝きましゝ君のめでたる紅椿昔偲びつゝ我は見つめぬ

風そよぐ夏の濱邊の草に坐し一人白帆の影を數へぬ

氣まぐれに夕陽うつれる海の面に小石投ぐれば音の淋しき

窓ごしにかすかに見ゆる彦島にはやともし火の影見え初めぬ

やはらかき朝の陽ざしを身に浴びて初鶯はのどかに鳴けり

冬の夜の巷淋しく更け行きて道行く人の影も少し

早春の陽のうらゝかに射す庭に犬と一緒に日向ぼっこす

人みな寢静まりたる如月の眞夜中に聞く猫の聲淋し

冬の夜に一人目覺めて書讀めば風のみ淋しく聞ゆ



籾内 静子

讃美歌の調べ静かに教會の窓より洩るゝ此の夕かな

雨の日に別れし君の賜はりし記念の花瓶淡緑なり

祖母オホハハの昔話を聞き居れば窓打つ雪の音のかそけき

あかゝとヘッドライトを照らしつゝ雨の夜更けを走る自動車

お隣のお姉様から贈られた包を解けば眞赤なりボン

吉元 マサイ

美しき草花なりと近づけば強き香の鼻を襲ひ來

うらくと陽炎燦ゆる野に立ちて春の氣分に浸りけるかな

蟲の聲清く淋しく響きけり萩の薫れる繁みの中に

十五夜の月の光に照らされて萩も薄も金色に見ゆ

幼くて別れし友の戀しさに夕の空を一人眺むる



梅  
花  
集  
(二  
年)



青木愛子

夕涼み父と母との三人で團扇片手に語るたのしき

ほのくくと明け行く空を眺むれば白くすみたる月は残れり

大掃除前も後もばたくと疊をたたく音ばかりなり

じいくと鳴き立つ蟬の聲聞けば暑さ一段まさる思す

我が叔母の丹誠こめて作られし帛も冬はさびしくなれり



伊木和子

冬の來て庭の草木の枯れたれば一きは目立つ黄水仙かな

黄水仙積れる雪の眞白きに映えていよく美しく見ゆ

門前に聞えるたりし犬の聲次第に遠のきて遂に消えたり

正月の七日となりてかの友の年に一度の端書來にけり

積りたる雪の眞上におかれたる南天の實のその赤さかな

岩崎博子

吹きすさぶ風の冷たき冬の夕豆腐賣る子の辛さをぞ思ふ

勉強をしながら庭を眺むれば何時しか延びし赤い鶏頭

喜の聲に満ちたる大八洲我が日の皇子の天降り給ひて

門毎に日の丸の旗ひらくとひらめく今日は紀元節なり

さら／＼と近くを流るゝ小川には小魚の群の躍り泳げる



浦上とき子

朝露をふみわけながら友だちとおしばなどりに山道を行く

打水の庭きよらかにこの夕いづこともなくこほろぎの聲

七夕のすぎし今日の日は蟬の聲何とはなしに秋をしのばす

庭の面打水すまし佇めばいづこともなく螢とび来る

美しき薔薇の花とて手を出せば眠れる蝶はとび上りたり

白木淑子

遠足のひるげ戴く乙女子の笑ひさゞめく聲の賑し

號外の鈴音聞えて街毎に喜の聲家よりもれつ

憧<sup>アコガ</sup>れの旅順の山の表忠塔今日の前に仰ぎ見るかな



遠足の朝の空を見上ぐれば小さき星はまたゝきて居り

昇る日に霜のきらめく冬の朝白息たてながら馬子は道行く

寫真帖今日も開けみれば我が母の亡き面影の姿なつかし

夏蜜柑の黄色き色は霜よけの藁の隙間にのぞきてゐたり

或日ふと庭の手入れをする叔父の早き白髪の眼につきにけり

奥 久子

藍色に小川の水はよく澄みて泳ぐ小鮎の姿よく見ゆ

松原に淡き光をなげかくる朧月夜の渚の静けさ

建國の歌口ずさみ國旗ふり威張つて續く小學生かな

櫻草花咲く頃に逝きましゝやさしき叔母を思出すなり

さわやかに陽のあがりたる田に出でゝ鋤をうちふる百姓の影



小川澄子

海の上をかもめは低く飛んで行き西のお空は眞赤なりけり  
 蟲干にふり袖を見て何となくお袖とほして我は喜ぶ  
 たまさかに幼き友とうちつどひ過ぎにしことを語るうれしさ  
 たそがれの庭の植木に赤とんぼ静かにやどり愛らしきかな  
 亡き友のかたみの品を見る度にありし昔の笑顔ぞ浮ぶ  
 シグナルの上り下りの音聞きて別れし友の顔うかびけり

太田政子

うすぐもり木枯れの庭の一すみに薔薇の蕾の膨らめるかな  
 ぼか／＼と日の照る庭の梅の木を枝から枝へうつる鶯  
 照りはゆる朝日と共に皇子様は御安らかに降り給ひぬ  
 夕暮のさびしき道をいさぎよく太鼓たゝいてパン賣りの行く  
 三月の節句も近くなりにはけり桃の蕾も大きくなりて



川野久枝

幾年か別れし友の便えて封を切りつゝ胸は高鳴る

數學の宿題解けたと喜べば柱の時計早や十一時告ぐ

見習の車掌大聲はりあげて覺束なげな足取あはれ

雪の朝眞白き庭に咲きいでし紅一點の山茶花の花

冬の日や炬燵かこみてまどぬする外には雪の降りしきるなり

川浪静

我が家の縁より見れば灯火の長く續ける月曜の夜店

山の端の入日に映えて金色にしよろさんぼの羽は光れり

暮近くしばし行來の絶えし道埃をあげてオートバイ行く

庭隅に放り置きたる蟬取の網に小雪の積りをるなり

麥畑の中に出來たる新道を高き荷積みて馬通り行く



川上綾子

湯歸りに夜學歸りの小學生見て思ひだす去年のことを

友達の海水浴に行く姿見送り居ればさびしかりけり

佛壇の前にすわりて燈を上げて手合すいたいけな姿よ

我が庭の枯れし草木の中にして椿の蕾ふくらみにけり

水仙の花の咲けるを見出しけり裏の畑の草叢のなかに

北島米子

夜おそく静かな町を鈴振りて夜毎にあるく饅飩賣る人

起きみれば屋根に雪かこまがふまで真白く霜のおりにけるかな

更けて行く夜の町にて唯一つ按摩の笛の遠く聞ゆる

雪解けの道にぎやかに行軍の歌いさましく通り行くかな

寒けれど我が家の庭の梅の花かほりゆかしく吹きそめにける



島田アキエ

風吹けばうねりて見ゆる麥畑の上に囀る小雲雀の聲

雨霽れて陽のかゞやけばちらくと庭の小石にかげらふの立つ

不知火の浮べる海を思はする木の間隠れの街のともしび

黄昏に光れる池に石なげて音にきゝいる初秋なりけり

氷はる静けき露路を一人行く我が足音の高くひやくも

志道淑子

母上の手許離れて來しゆゑに恒見の濱邊に家を思ひぬ

やさしくもさびしくも見ゆる月見草夕闇の中に咲きいでにけり

木枯しの吹き來る寒き山道をあはれなお遍路身を包みて行く

來む春に新入生を迎へれば姉様らしき二年生となる

二階より向ふの山並見てあれば朝日は照りさす足立山の上に



冬空にプロペラ高くひゃかせて今飛行機は足立を越ゆる  
 空晴れて風の冷たき冬の朝學校さして急ぎ行きけり  
 何處よりか馬の蹄の音聞ゆ秋風の吹く村の小道に  
 家毎に掲げし國旗はためきて今日はめでたき紀元節なり  
 静かなる海邊に立ちて眺むれば鷗が二三羽飛んで行くなり

角 一 惠

そよ／＼と若葉は風にうちそよぎ朝日すがしき夏の朝かな  
 雨上り島に遊ぶ鶏は緑の若葉つゝきをるかな  
 山里は日暮近づき紫の夕餉の煙立ちこめにけり  
 この池の鏡の如き水の面に露を宿せる草のうつれる  
 子供等の歌聲消えて夕暮るゝ庭先に散るさびしき落葉



武谷安代

藪かげの小路通れば涼風は青き草の香匂はせて吹く

明日よりは休暇と思ふ楽しさに一人はしやぎて水撒きをする

鹿兒島の叔母のよこしゝ便りにはなつかしき顔も見ゆる心地す

躍る胸じつと抑へて小包の固き結び目ほどく楽しさ

小雨降りて着たる晴着の打ちしめる灯影小暗き祭日の夜

田仲芳子

馬の蹄バツカ〜と音たてゝ家に歸るかから車曳きて

手をふりて雪が降るのに駆けまはる子供かはゆし赤きその頬

杓子もて鍋底たゝきて二つの子朗かに聲たて喜びにけり

かぢけたる手に息はきかけ掃除婦は北風寒き國道を掃く

踊り場の太鼓にぎはしきお祭日宮のきざはし急ぎのぼりぬ



田中美穂子

おば様の故郷土産のお話を床に入りて聞く時の嬉しさ

日曜の朝とくに起きて庭に出づれば空よく晴れて霜白くおく

静けさを破りてひびく汽車の音に懐しき故郷思ひ出すかも

笛の音のいづこともなく聞えきて母待つわれの寂しさを増す

朝早く釣瓶のきしる音きこえ母の起きたるここの知らるゝ

高鶴信子

馬鹿々々と喧嘩をしては先生に叱られし頃ぞ今は懐し

師の君は如何に毎日を暮しまさむ別れ来しより早十月立つ

師の君の優しき教いやがりて聴きたりしことも今は戀しき

吾が校のモダン校舎の噂きゝ指折りかそへて其日待つなり

夜の更けにひとり机にむかひたる心ますゝ静になりゆく



市川美佐子

母親に呼び起されてしぶく〜と起きて出でけりラヂオ體操

弟は知つてもゐない言葉をば人に話していばるおかしさ

隠れんぼ隠れてゐれば犬が來てワン〜吠えて鬼に見つかる

眞黒な煙を後にのこしつゝ故郷の村に向ふ我が汽車

夕空のさびしき空にぼんやりと圓い大きな月は出でたり

千々和ミツ子

幼稚園に遊び戯るゝ子を見れば幼き日の事思ひ出しけり

勉強を終へたる後の氣輕るさよ大欠伸して床に入るなり

くり返しくり返しては指を折り歌を讀む事のむつかしきかな

待つて居た洋服出來ていち早く見せんものをと急ぐ歸り道

御足をふみはづされておかくれのペルギー皇帝御あはれなり



坪井富士恵

日の丸の御旗かゝげつ人々は建國の日を忘れまじとて  
 あらたまの年をむかへて更に又はげみ學ばん誠の道を  
 寒かりし夜半の嵐の静まりて足立の山にけさの白雪  
 暖に雪とけそめて子供らは七草摘みに瓜をそむらむ  
 荒海へ旅立ち給ふ姉上に幸あれかしと祈るわたし等

(卒業なさる四年生の方に)

土谷貞子

弟の寝てゐる顔を覗き見て晝どかはりて愛らしと思ふ  
 どんぐり目口とがらせて弟のにらみつこする眞面目な顔よ  
 ちらほらと夕靄つゝむ玄海に遊覧船の灯火見ゆる  
 玄海に朝霧立てる朝まだき沖ゆく船の汽笛いさまし  
 弟と我のつくれる金盞花雜草の中に蕾見えたり



夕暮に裏の小川で姉さんと洗濯をする心楽しさ

ほか／＼と日あたりのよい縁側で三毛猫鞠にそばへつくかな

叱られて怒つた後の心には人にあふのが恥しいかな

六つの花ちら／＼降り積む今日の朝雀ばかりが囁り居るかな

夕やけの田圃道をばてく／＼と一人で歩く心淋しさ

ちら／＼と雪降る景色眺めつゝ和歌を思ひつそのむつかしさ

待ち待ちし年の初も過ぎゆきて學年を終る三月となれり

朝起きて庭に靡きし笹の雪今日の寒さの思ひやらるゝ

人たえて寒さ増しくる夜のふけに軒端たゝきて吹雪の音する

我家を遠くはなれて姉上のたよりのくるを待ちつゝ暮す



成田一子

朝起きて先づ國旗をばいだしけり直く清けき心もちて

朝風にはためく國旗に送られてわれ元氣よく家を出でけり

日の丸を染めいだしたる我が國の國旗にまさる國旗はあらじ

たぐひなき我が大君のいつまでもおはしませとぞ我をろがみぬ

うるはしき朝日を浴びて枯枝に春をば告げて小鳥歌へる

錦戸マユミ

入道雲眞夏の庭の梢より現れ出でて西に流れたり

暗がりの芥屋の大門の奥深く神の前にて我ぬかづけり

雷山に夕暗せまり玄海は白波の怒る音の聞ゆる

赤々と夕陽に映ゆる玄海に生の松原黒々と見ゆ

寒宵の夕べのチリにつどひきてラヂオ聞くなり楽しき夕餉



葉山禎子

製鐵の汽笛の音に目覺むれば硝子障子の薄明りかな

プロペラの轟く音に見上ぐれば紺青の空に陽はうららなり

さし出づる朝日とともに日の御子は産聲高く生れきましぬ

我が庭の桃の新芽のやゝ青み靜かに春は近づきにけり

母さんの氷わる音聞きながら青空を見て臥すいたづきの日

淵上藤枝

樂しみは今日の一日事なくて勉強すまして床に入る時

嬉しきは高跳とびし瞬間に竿も落さず飛越えし時

紀元節の築港の砂場の旗多き打寄せて來る大波のごとし

新らしき雑誌ながめて道を行く小さき子等は喜ばしげに

登校の道の撒水氷りけり子等はその上で遊びたはむる



藤田澄江

皇太子生まれまし、年我家に男の子うまれし事のうれしさ、

風情なき木々の間につ、ましく白梅かほる早春の庭

みぞれふる今宵はらからうち集ひストーブの邊に父の笛きく

しんく、と粉雪降る夜は更けゆくに故郷の尊果もなきかな

かりそめのいたづきにすら寝もやらぬ母の情に涙しぬ今日は

藤本とし

夕立のさりたる後の庭の面に出来たるくぼみに木の葉浮べる

初霞降りて喜ぶ妹等寒さ忘れて眺め入るかな

青竹を手に手に持ちて急ぎ行く夏の初めの螢狩かな

朝起きてガラスを通し外見れば庭も枯木も眞白な雪

暖かき南の庭にむしろしきまゝごころをする幼なき妹



藤戸和子

赤や黄や色こりどりの花の上にもんしろ蝶は戯れ遊ぶ

梅の木に鶯こまりよい聲で鳴きそめしころ朝日さしきぬ

轟々と爆音聞ゆる阿蘇登り火石はばつとどびちりにけり

雪降れば男の子らはあちこちに駈けまはりつゝ戯れ遊ぶ

ランドセル脊負ひ出で行く弟の後姿を見送る祖母は

松本ユキ子

夜は更けてかそけき波の音の間にボンボン蒸氣の音の近づく

初春ののどけき日和山伏の法螺貝の音遠く聞ゆる

打ち水の庭に張りたる薄氷くだいて廻る子供達かな

梢より飛び立つ雀の羽音にて目を覺したり日曜の朝

我一人ペンを走らす夜は更けて夜鳴きうどんの鈴の聞ゆる



松 本 光 枝

木枯の吹きしく屋根に小雀が二三羽とまるこくびかしげて  
 炬燵にて外眺むれば庭の草葉先葉先は萎びをるなり  
 霜の朝草の葉先をふと見れば小さき柱一つばいたたり  
 紅梅の花美しく老木のその太幹は苔むしてをり  
 夕暮の町はしづかに暮れ行きて店先の燈は人の眼をひく

宮 崎 ミ キ

仕事する手をふとやめてなげきけり今日此の頃の日の短さを  
 勉強をよそに遊べる子供等のその心にもなりて見たきかな  
 急ぎ行く足裏にふれて冷かり露を残せる芋島の朝  
 懐しき母校の庭を眺むれば記念に植ゑし柳茂れり  
 何處までも續く田圃の細道を草笛吹きて通る人あり



宮崎 桂子

新しきインクの香喜びて友に文書く嬉しき夜よ

ヴァイオリン片手に持ちてステージに夢中にひいた演奏會かな

樂しみはたまさか父につれられて遊園地の中まはるその時

夕ぐれに弟と濱べに出て見れば岸にうち寄せはぬる白波

樂しみは明日の遠足を思ひつゝお菓子をかひに町に行く時

村田 榮子

夕暮の濱邊にたちて潮風に洗ひざらしの髪をなびかす

自動車も電車も旗を翻し花火の音は空にひびけり

白雪のふりつもりたる南天に冬の陽光はあはくさしたり

ふと見れば庭の小さき椿の木蕾ついたり二つ三つ見ゆ

木の蔭に寂しく咲きし山茶花は昨日の風にもろくも散りぬ



森 敏子

父上のお歸り遅くさびしき夜お話聲が部屋中にひやく

上京の母上思ひ日めぐりをにらみてゐたる晝さがりがな

よごれたる箱一ばいの銀紙に幼なき頃のなつかしきかな

神だなに背伸びをしつゝ手をのばし櫛を置きえし背の嬉しさ

幼な子はいくつ寝たらばお節句と指折り數へ待つてゐるなり

八木 延

植物の標本出してしのぶかな楽しくすぎし夏休のこと

寒空にえさを拾ひゐる雀ゐて雪はらくと降り出でにけり

霜おける畑をかたへに眺めつゝ學舎へ行く足どりは輕き

祖母おははの昔話に聞きふける楽しき我が家の夕べのひととき

コスモスの我が脊よりも高ければ花を咲かすも近きうちにか